（4） 高齢術後胃がん患者の食を支える家族の困難と対処

医療福祉学研究科保健看護学専攻修士課程　○太田巳佳代
医療福祉学研究科保健看護学専攻　大田　直実

【目的】

胃がん患者は高齢者に多いがんの1つであり加齢とともに増加する．治療の第1は手術のため術後消化機能が変化する．近年65歳以上の高齢術後胃がん患者において栄養不良で生じるサルコペニアが術後合併症や生命予後にも関連することが報告されている．入院中は医療下における栄養管理になるが退院後は患者自身および家族の協力のもと栄養管理を行い順調な回復を得ることが重要である．そこで本研究は，高齢術後胃がん術後患者とその家族に充実した食の支援の示唆を得るために，高齢術後胃がん患者の食を支える家族の困難と対処を明らかにする．

【方法】

研究デザイン：質的記述的研究 研究参加者：胃がんと診断され術後1年目を迎える65歳以上の患者と食生活を共にしている家族4名 データ収集方法：研究者が作成した半構成的質問紙を用いて電話インタビューを行った．分析方法：参加者の食の支援に関する困難と対処の語りを抽出し，質的帰納的に分析した 倫理的配慮：川崎医科大学・同附属病院倫理委員会の承認済（承認番号：5665-00）

【結果】

研究参加者は4名で，男性1名，女性3名，平均年齢68.5歳，有職者1名であった．患者の術式は，全員幽門側胃切除術だった．高齢術後胃がん患者の食を支える家族の困難は，患者の食事量に関する不安と戸惑い，術後の食事に関する知識がない事で対応の難しさ，患者の食べ物への欲求を満たせない難しさ，他の家族の食事を作らないといけない負担，患者の状態に応じた食事の情報を得ることができない困難さ，患者の状態に合わせた複数回の調理に対する負担，患者のための食事作りに対する虚しさの7カテゴリーが抽出された．対処は，胃切除後の情報を得る，病院でもらった資料を参考にして工夫を加えた食事を作る，患者の少量しか食べれない胃の状態に合わせて対応する，体力や栄養バランスを考えて食事を準備する，胃の負担にならない食事を準備する，患者の意向を尊重した食事を準備する，家族からのサポートを取り入れる，患者に対する責任を果たす，食に対する負担感を減らすの9カテゴリーが抽出された．

【考察】

高齢術後胃がん患者の食を支える家族の困難では，患者の食事に対する不安や術後の食事に関する知識がない事，また患者の残胃に応じた食事の情報を得ることができていないことが明らかとなった．指導内容を含め家族の理解度に合わせた指導が必要である．また，対処は胃の負担にならない食事を病院でもらった資料を参考にして食事を作っていた．不足する知識を獲得できるよう有効な情報の提供の必要性が示唆された．